

Biggles and Buddy (ビッグルスとバディ)

2018. 4. 5 (木) William Mudgree

(第1話) ザ ロックスでの出会い

「変だな。あの二人。70歳ぐらい。女性は小奇麗だが、男は長袖で長ズボン、みすぼらしい服装だ。見ていられないよ」とスコッチテリア犬のビッグルスが言う。この時期はほとんどの人は半袖、半パンだったからだ。同じテリア犬のバディはよく見ていた。「背中がひきつれて、ズボンはたれさがり、パンツが垣間見えている。まるで認知症患者みたいだ」「この辺では見かけない格好だ。アーガイルストリートから来るのも変わっているなあ、普通はサーキュラーキー駅から来るのだが、此の辺の気候を分かってない旅行者だよ」「変わっているよなあ」「どう見てもよそ者だよ」二匹の犬は変な夫婦を気にしていた。この夫婦は必ず迷子になると確信していたからだ。ビッグルス8歳、バディ6歳だった。

トンネルのアーガイルカットの手前で男性が「ロックスは何処ですか」と聞いていた。聞かれた人は「ここです」と答えた。

「当たり前だよなあ。ロックスに来て、ロックスは何処ですか。なんて聞く人は今だかつて聞いたことがないよなあ」ビッグルスが言う。

「あの二人はどうかしているよ」バディが応える。

トンネルのアーガイルカットの出口に階段がある。そこに上がると思った。その階段は知る人ぞ知る階段だ。ここを上がると Sydney Observatory があって、小高い丘の上に東屋がありそこからの眺めは素晴らしい。特に夜景は一軒に値する。そこを上がるなんてこの夫婦はよっぽどこの辺に詳しいのか。

「そんなことこの人に分かる訳がないよなあ」とビッグルスが言うや否やその階段を3段上がった所で女性が腰を下ろしてしまった。

この階段を登るのかと思いきや「どうしたのだろうか」バディは眼を疑った。

女性は靴を脱ぎ始めたのだ。何を始めるのか。ビッグルスとバディはじっとその動作を見守った。靴下を脱ぎ始めた。「まさか裸になるのでは」バディはびっくりだ。

男性が何やら取り出しているぞ。「ばんそうこうだ」女性の足に張っている。

「何だあ」ビッグルスとバディはため息を。豆ができて動けなくなったのか。

「だから言うこっちゃない。一体どこから来たのだ」バディが聞くと。ビッグルスが誰かから聞いたのか「どうもタウンホールから来たようだ。その後、ダーリングハーバーを経て高速の下を通り、BEYに沿って、ビル街に入り、途中エレベーターで KENT STに出てきたみたい。とんでもないコースだ」「ほとんどの人は通らないよ」「初めはオペラハウスに行きたかったが、全然方向違いのダーリングハーバーに出てしまい。オペラハウスは諦め、ロックスを目指したと言っていた」「なんだ」サーキュラーキー駅から来ればすぐなのに。又、歩き出したぞ。二人は喜んでるぞ。息が吹き返したみたいだ。やっとロックスマーケットに来れたのだから。

「どうも変だぞ」二人の顔色が変わった。疲れ切っているからだろう。

左に曲がればロックスマーケットがあるのに、下に降りてしまったぞ。カドマンの家 (Cadman's Cottage) の前、シドニー湾の手前広場だ。口に炎を持って逆立ちをしたり、パーフォーマンスを行っていた。それに気を取られたのか。「二人は離れて歩いているぞ」
「それもそうだよ。あの恰好じゃ奥さんが一緒に歩きたくないんだよ」と噂していた。
「近寄らないでよ」と言っているみたいだ。

右手のARTセンターの入り口で、婦人の方は階段に座り込んだ。男性は中に入って行った。アボリジニの作品に興味があったからだ。

ロックスマーケットを知らないのか。折角来たのにマーケットを見ないのか。
男性が帰ってきた。ビッグルスがバディに「教えてあげたら。折角来たのに、マーケットを見ないで帰ってしまうぞ」
バディがそっと婦人に寄って行く。何故か二人はお互いに昔から知っているような雰囲気だ。婦人もバディに何故か着いて行くことになった。何となく。

1年後にまた二人が再開するなんて誰が予想しただろうか。

「あった。ここだ」と叫んだ。二人はやっとロックスマーケットに来れたのだ。
老人はアボリジニの絵がほどこされているブーメラン (Returning Boomerang) を購入した。投げたものがまた自分に戻ってくるなんて。不思議でならなかった。
奥さんはプレゼント…for you を

(第2話) ビッグルスとバディの出会い

ビッグルスはこの界限では慕われて、名が知られていた。
バディはゴールドコーストのマジラバーで生れ育った。一年前にシドニーに来たとき、飼い主とはぐれてしまったのだ。飼い主は通称トムと言っていた。トムはバディを目に入れても痛くないほどかわいがっていた。あの時もっとよく探していればよかったのにと、今でも後悔している。仕事がありゴールドコーストに帰らなければならなかったからだ。トムの顔色も姿も年をとってしまった。口数も少なくなり、何ごともやる気が無くなっていた。

バディは一人では生きていけなかったが、ビッグルスと出会い、生き方を学んだのだ。何も知らないバディに尻尾を振って近づいてきたのだった。そして何とか生き延びたのだ。

二人はいつの間にか仲良しになっていた。ビッグルスは母親を亡くし、二人の兄弟も無くしていた。兄弟が出来てうれしかったのだ。バディも二人の兄弟を亡くしていたからだ。食べ物をつかち合っていた。友情を培っていたからだ。

バディが迷子になったのはハイドパークで遊んでいた時、何故かうれしくて勝手にどんどん先に行ってしまったからだ。ドメイン広場、ロイヤル・ポタニックガーデン、NSA州立美術館などなど、海にぶつかりミセツマックオーリーズ・ポイントでのオペラハウスの眺めは最高だった。ハイドパークに戻った時、シドニー病院あたりから分からなくなった。家族と行き違いになったのだ。タウンホールや旧市街に入る。どんどん下って行った。登るより

下る方が自然だからだ。楽な方へ楽な方へと足が運んだのだ。いつの間にか知らないダーリングハーバーだった。何かえさの匂いがした。ちょうどシドニー一番の海鮮市場フィッシュマーケットがあったからだ。だけど何故か物足りなかった。自然とロックスに向かったのだ。不思議なもんだ。何故ロックスに向かうのか。古い歴史的な街の路地を進んだ。居心地がよかったからだ。

Sydney Observatory からオペラハウスを見ると何故か勇気を与えてくれた。夢を与えてくれた。ここでなら何とか生きていける。希望のある人生が送れると思ったのだ。

そこで初めて二人は遭遇したのだ。

THE ROCKS 。そこが二人の出会いの原点だった。

If ビッグルスがバディに会わなかったら、then 今はどうなっていたらろうか

If バディがビッグルスと会わなかったら、then 今はどうなっていたらろうか

「考えるのも恐ろしいよ。絶対に離れないぞ」

「きっとだよ」

(第3話) The Rocks Market (ロックスマーケット)

一方この夫婦はこの後バディが育ったマジラバーに帰るのだ。

バディがこの夫婦について行けば生まれた家に帰れたのだが。

この時はまだ夫婦とバディは知らなかった。

今はバディが夫婦を連れ歩いていることになっている。夫婦は喜んだ。婦人はバディの顔を両手でつつみ「ありがとう」と声をかけていた。老人の方は眼で合図をおくる以外声をかけなかった。犬の扱い方を知らなかったからだ。何も言わなかった。老人は小さい頃、犬の顔を撫でようとしたとき、指をかまれたのだ。医者に駆け込んだのだった。苦い経験があり、犬とは距離を置いていたからだ。

ここがロックスマーケットだ。何でわからなかったのか。この犬のお蔭だ。マーケットを小一時間歩くと足は棒のようになっていた。だが疲れない。どうしてか。バディが居るからだ。婦人は足に豆が出来て歩けなかったのがウソのように。プレゼントの買い物もできて満足だった。

此の頃、ビッグルスとバディはロックスでは皆に知られていた。

ビッグルスとバディが通ると喧嘩していた二人は仲直りするのだ。そして町を明るくするのだ。

「なによ、あんたのせいで。パスポートが無くなったのよ。どうしてくれるの！」と女性が喧々諤々と男性を攻めたてていた。男性は反論する暇もないほど怒鳴りつけられていた。

「あんたのせいよ」男性は小さくなっていて。そこへビッグルスが通り、女性に近寄る。それもそっと空気のように、女性に気が付かなかったとしても不思議ではない。そっと自然に近づくのだ。誰でもが出来る芸ではない。女性はビッグルスによって落ち着くのである。そしてバディがパスポートのあるところに鼻を寄せる。と！その所のカバンの中にあつたの

だ。もう感謝感激だ。旅行先でパスポートが無くなったら。もうお先真暗だ。それが一転して。二人はハッピー。

朝に夫婦喧嘩もビッグルスとバディが通ればすぐに解決してくれた。

二人が明るくなれば、旅行客も明るくなる。

そして街も明るくなる。売り上げも伸びる。

皆ハッピーだ。

おはよう ビッグルス

こんにちは バディ

足ることを 幸せ運ぶ テリヤ犬

ハッピー ビッグルス and ハッピー バディ

その評判はロックスからシドニーへ。

そしてゴールドコーストまで広がった。

噂はマジラバーにも届いた。

(第4話) 夫婦喧嘩

トムはまさかこの噂の主人公が自分の息子バディとはまだ気が付かなかった。

もう諦めてお墓を用意していた。バディの顔写真を組み込んでいたお墓だ。

しかし、バディはビッグルスの見よう見まねで生き延びられたのだ。

バディはあの日を忘れなかった。合唱団がオペラハウスの広場に100名やってきた。

一人ひとりの歌声は、一つ一つの楽器が奏でられ調和するオーケストラのように

時に悲しく、時にやさしく、時に力強く

青空に高く、高く、高く

こんな調和して響き渡った歌声を聴いたことがなかった。

「おお オーストラリアよ」

「おお シドニーよ」

「おお オペラハウスよ」

オペラハウスの球面に反射して、ロックスに届いた。

歌声はバディの心の中に入り込んだ。両親の温もりを感じられた。

そして勇気と希望と夢を持つことが出来た。

「ロックスで生きよう」

その時、もうビッグルスの体を病が蝕んでいたなんて誰も分からなかった。本人もまだ意識していなかった。あと数年の命であることを知っている人は神様だけだったからだ。

「君は素晴らしかったよ」とバディがほめあげた。

「あの時の夫婦喧嘩はすごかったよなあ。誰も止められなかった。それがちょっとした空気を読んで両方の空気に入り、空気が変わったのさ」

「みんなほっとしたよ」「殺し合いが始まるかと思ったよ」

「夫婦げんかなんてちょっとしたことから始まるもんさ。どちらかが相手の立場に立てば収まるんだ」とビッグルスが教えてくれた。

「夫婦げんかを無くす方法はないのか」

バディの家では夫婦喧嘩を見たことがなかったで、何で夫婦喧嘩が生まれるのか不思議でしょうがなかったのだ。

「簡単さ、お互いに言いたいことを言うことさ。言わないとうっぷんがたまってくる。そうするとある時爆発するのさ。言いたいことを言うにも一線を越えてはいけない。それだけだ」

「そうだ。もう一つ大事なことは。男は女性に勝てないことを知ることだ」

「どうして？」「男は母親つまり女性から生まれているからだよ」

「なるほど。男が女性に勝とうなんて思ったら、それでおしまいさ。生んでくれないからな。本来喧嘩は二人で解決するものさ。だけど近頃解決されなくなってきているのさ。そこでおいらの出番が出てくるのさ」「どうやって」

「落ち着かせるのだ。冷静に考えさせるのさ。よく考えてみれば、相手が悪いのではなく。自分が悪いことに気が付くのさ」

(第5話) ビッグルスの過去

ビッグルスはバディに打ち明ける日が来たと思った。

「バディ、実は君に私の親兄弟の事をまだ話していなかったね」

「聞いて無かったよ」

「かあちゃんは夜の道で車にはねられ、即動物病院に運ばれたが間に合わなかったのさ」

「ええー。どうして」

「背骨骨盤が折れ、顎が外れ、爪も取れて苦しんで死んだのさ。かあちゃんはドッグフードが大好きだった。道路の反対側にドッグフードの袋の中味が開けられていた。その匂いを嗅ぎつけ、道路を渡ろうとしたのさ。最後に、かあちゃんは決して人間を信じるなどと言って死んだんだのさ」

「お母さんはどうしてドッグフードなんかに手を出したの」バディが聞く。

「お腹が空いていたんだ。もう餓死状態だったのさ」とビッグルスが応える。

「どうして」「自分たちにはお腹いっぱい食べさせていたのに。自分たちも気が付いたので、聞いたことがあった。どうして食べないの」と。「お腹が一杯なのよ」と言っていた。「何も食べていないではないか」と聞いたが

「花を見ると、お腹が一杯になる」と言っていた。花を見てどうしてお腹が一杯になるのか分からないよ。今から思うと、かあちゃんは花が好きで、花を見て満足して、心を満たしていたのかも。「花をみて、心を満たして、どうして生きていけるのか」と続けざまにバディがきく。「我慢していたんだのさ。僕たちにひもじい思いをさせないためにさ」ああ、どうして早く気が付かなかったのか。そうだ。「いつも、かあちゃん、お腹すいたよー」と言って困らせていたんだ。おっかあーの気持ちも分からないで。「かあちゃんごめんよ」

僕たちは弟と、妹の3人兄弟だった。3人の兄弟は喧嘩もしたが仲良く生活していたが、かあちゃんが亡くなってからは生活するのが難しくなった。

「これ以上、僕たちをいじめないでほしい。いろんな町に行った。町から町へと歩き回った。落ち着く場所を探していた。安心して生活できる寝床を探していた。一番遠かったのはワトソンベイ、ボンダイベイも行った。リッチな人が多かった。サリーヒルズとパディントンもよかった。パディントンは過ごしやすかった。マーケットがあり残りの食べ物にいつもありつけたからだ。マーケットのある町は過ごしやすかった。キングスクロスにはマーケットの規模は大きくないが皆優しくかった。芸術家が多かったかせいとも。残飯をあさる生活はだんだんボデイブローのごとく効いてきた。最初に一番元気な弟が、次に可愛い妹が亡くなった。その時、次は自分と思った。まだ生きているのが不思議さ。一人ぼっちになったその時、死のうと思ったのさ」

しかし、ビッグルスはどんなに腹が減っていても、がつつ食べなかった。中味を確認して、匂いを確認して、少しずつ食べた。腐っているもの賞味期限の切れているものを見極めていたのだ。素晴らしい才能を持っていた。だから一番長生きした。

ロックスに来てオペラハウスを見て感じるものがあった。その時、君に会ったのさ。バディ、「君は私の救いの神様だよ。君はどうしてここへ」「私も3人兄弟だったが、君と違って何も苦勞もなく育ったのさ。毎日決まって食事は出るし、散歩もしてくれるし、申し分のない生活だった。兄弟2人が亡くなり。寂しくなったのさ。シドニーに遊びに来たとき、飼い主と別れてしまったのさ。自分でもわからない。遠くに行きたかった。冒険したかったのさ。」

(第6話) 神と一対一

「オペラハウスを見て、希望が湧いた」

「オペラハウスを見て、力強さと強い意志を貰った」

「つまり勇気と希望と夢を」

「オペラハウスは不思議な力を持っている」

バディはビッグルスにどうしてそんなに他人にやさしくできるのか不思議でならなかった。母親が人間に殺されたのに、どうして皆を明るくさせる力を持っているのか不思議でならなかった。バディはビッグルスに聞いてみた。

「どうして人間を信じるようになったのか」

「何故だかわからない。未だに人間を信じていないさ」

「わからないなあ」

「神様を信じるようになったからかも」

「へえー」

「神様と直接話したのさ。神様だけと結びついたので。そうしたら自然と…。人間とも仲良くなってきたのさ」

「そんなもんかい」

バディはビッグルスに「君に家庭の温かさを教えてあげたい。そうだ、今からそこに行って見よう」「いや私はもうそういう体ではない。ロックスで最後を迎えたい」

「残念だなあ。シドニーに来て初めて思ったよ。マジラバーでの家庭の思い出は忘れないよ。トムのやさしさ。温かい家庭。元気な奥さん。最高だったよ。俺を息子と思って居たんだ。何で離れてしまったのか。これも運命か。もう一度生きているうちに戻りたいなあ。ビッグルスおまえも一緒に連れていてあげるよ」

「おれはもうダメだ。一緒には無理だ。足手まといになるだけだよ。その代り、おれの魂を連れて行ってくれ。きっとだぞ」「わかった」それからバディは故郷マジラバーへ行く旅を考えていた。

ビッグルスの旅が終わった時

自分がこの旅を引き継ぐのだ

そうすれば旅は永遠に続くのさ

ジャガランダ 歌いかけては お返しす

(第7話) ビッグルスの死

あれから1年。遂にバディもロックスを去る日が来た。何故なら、ビッグルスが不慮の事故で亡くなったのだ。まず足を痛めたのだ。左足首をひび骨折、左殺傷さ。傷口が深かったのだ。バディはビッグルスの傷口を舐めて清めてあげた。ばい菌で化膿することはなかった。それだけは幸いした。人間だったら、1か月から2か月はギブスと松葉づえ。

それまでは風呂に入れない。トイレも一人ではいけない。犬にはギブスも松葉杖はない。痛む足を引きずって動くしかない。苦痛を感じながら餌を探していた。

「なんてこった。それでは死んだ方がましではないか。この気持ちは怪我になった者しか分からないのさ」

「そうさ。ビッグルスはそれでもがんばったのさ。みんなから臭い臭いと言われていた。僕だったら我慢が出来ないよ」風呂に入れるようになるのに2か月かかった。

「それからリハビリさ。暫く歩いていないと歩き方も忘れてしまうのだ。筋肉がかたまり。全身筋肉痛になるのさ。それを直すのがリハビリさ」

「人間ならリハビリ師がついてやってくれるが。ビッグルスの場合はすべて自分でやるしかなかったのさ。大変だったのさ。やっと思どがついたのに、動物にとって怪我は致命傷なんだ。特に足の怪我は。内臓にもくるんだ。人間でいうと末期症状だ」

それでもビッグルスは弱音を吐かなかった。

「おとうーさん、おかあーさん…」と心の中で叫ぶだけだった。

「神様助けてください」

ビッグルスは一人ひとりに挨拶に回った。

「ごきげんよう」

「おはよう」

「こんにちは」

と最後の務めとっていたからだ。

ビッグルスを抱いて「よく頑張ったね。もう心配することはないよ。安らかに」と声をかける人はいなかった。

最後にビッグルスと目があつた。その眼は何かを求めている。目にバディが写つた。

両親の眼差しが写つた。そして、目は何か言いたかつた。

「幸せだったよ」と聞こえた。

まだ、言いたいことがあるようだったがそれは分からなかつた。

見送つたのはバディだけだつた。

「もっとできることはなかつたのか」後悔した。

現代医学の力を借りていれば、もっと長生きできたかも。

「許してくれ」と叫んだ。

そして、ビッグルスの旅は此処で終わったのさ。

「あの時、夫婦喧嘩を止めてくれたことを忘れない」

「僕らは苦しいときも精一杯生きた」

「君が生きたこと ロックスは 忘れない」

「君が生きたこと オペラハウスは 忘れない」

「ありがとう。ビッグルス」

「さようなら ビッグルス」

[Good by ビッグルス]

「See you ビッグルス」

「天国でまた会おう」

(第8話) バディ故郷へ向かう

バディは来る日も来る日もオペラハウスを眺めていた。以前、勇気と希望と貰っていたからだ。満月の日のある晩のこと、満月の中にビッグルスの顔が映し出された。「お前も幸せになれよ。故郷に帰るのが一番いい」とビッグルスの声が聞こえた。

次にトムの顔が映し出されたのだ。お互いの顔が満月の中に相手の顔が映し出されていた。トムは満月の中にバディの顔をマジラバーで、バディは満月の中にトムの顔をシドニーで見つめていた。満月に反射していたかのような感じだ。

満月は一つしかなく、寂しそうだった。

トムも同じ気持ちだった。南十字星がその横でうっすらと輝いていた。

トムはバディのことを一度は諦めたが、何故か悔いが残っていた。今なら間に合うかもしれない。もう一度シドニーをしらみつぶしに探してみたい。生きているかもしれない。あの時、しっかり探していればとの思いは脳から離れなかつた。

遂に一大決心した。ゴールドコーストの仕事も辞めて、バディを探すために、シドニーに

向かった。

「バディを見つけるまで帰らない」と奥さんに言って出て行った。

一方、バディには「帰ってこいよ」「バディ カムバック」

トムの声が聞こえてきた。その呼び声は日増しに強くなった。遂にバディは自分の故郷がマジラバーであることを風の便りで、風の匂いで、突き止めたのだ。

「マジラバーで生きよう」

バディは Sydney から Gold Coast への長距離トラックに乗ることが出来た。Gold Coast の ROBINA TOWN SENTER (ロビーナ タウン センター) に降ろされた。

だが、バディは道を間違えてしまった。近道があったはずだが、記憶を思い出せなかったからだ。そして Mudgeeraba の町に入ったところで、変な老人に会ったのだ。何処かで見たことのあるみすぼらしい老人に。70歳前後の長袖長ズボンの老人だ。そうだ1年前ロックスで見たことがあった。夫婦の一人だ。何か道を行ったり来たりしている。出来たばかりのコンビニに入って何か聞いている。ベンチでパンをかじっていると、誰かが声をかけた。送ってあげようと言っているが断っている。また違う人が声をかけている。それも断っていた。この老人は他人の好意が分からないのか。

この老人は墓地に興味があるらしい。一番大きい墓石に近寄っていた。写真が組み込まれていた、若い頃の写真だ。「どうしたのだろうか」若くしてこんな立派な墓石。不慮の事故で亡くなったのか。「なんで早くいってしまったの、順番が違う」と遺族の方が嘆いているようだ。

「どんなに立派な墓を造っても本人は帰ってこない」と呟いた。

バディもビッグルスの墓はどうなっているのか思い出していた。

「あと何年生きられるのか」

そういえば3年前は二人の兄弟がいたが亡くなってしまったことを思い出していた。

人間はいつか。自分もいつか。と考えていたら、

何故かこのみすぼらしい老人に愛着を覚えてきた。老人は自分にハローとかモーニングと声をかけるがそれ以上はしゃべらない。犬の気持ちがわからないのか。言葉が分からないのか。突然、教会に入ってしまった。

今日はイースターだ。

子どもも参列していた。老人はよっぽど疲れていたのか、頭が目がぐるぐる回っていた。何かを連想していた。

神の子ども→神の子→神子→紙子→紙衣

むかし「紙衣」という言葉を聞いたことがある。紙衣とは「かみこ」と読む。紙で造った衣だ。貧しい人が着る着物だ。この老人はまさに紙衣を着た人だ。それでも自分で満足しているのだから、人が何と言ようと関係ない。自分が貧しいと知ることによって満足することで身を軽くするのだ。自由になれるのだ。人生とは、自由とは、そういうものか。

紙衣＝神子 紙衣を知ることによって神と向き合ったのだ。神と一対一に。

そして席を譲ってくれたご婦人に、お礼に小さな紙を **Present for you.** と言って渡した。教会では一体何をプレゼントされたのかって聞かれていた。

「単なる紙よ。それも小さな紙よ」とご婦人は答えていた。

老人は見知らぬ人に席を譲ってくれたのに、**if** 何もしなかったならば、**then** たとえ貧しい代名詞の「紙」をあげることは「かみ」につながることを理解してほしかったのか。

「そんなこと通じるわけではないよ」「そうだね」

教会からなかなか出てこなかった。何をしているのか。

God is All of life

歌声が終わったようだ。出てきたとき、顔色が良くなっていた。人が変わったようだ。疲れていた足も生き生きと歩き出した。

カンガルーポイントに来て何かを探してまた戻って行った。**Heritage post office** まで戻って行った。マップを無くしてしまったからだ。また戻ってきたら、また探しに戻って行った。今度は教会の中で座りながらスケッチした紙を何処かに落としたりしたい。**Heritage post office** を越えて **village** まで戻って行った。そんなの諦めてしまえばよいのに。人間って分からない動物だ。そんなに大事なものなのか。マップに挟んであった紙が風で飛んで近くの草むらの中にあったのだ。信じられない。よく草むらの中から見つけるものだ。

これを見ていた人は言った。「突然、強風で紙が舞い上がった。高く高く高く、ゴールドコーストの高層ビルの高さまで舞い上がった。風は強く強く強く、鳥が飛ぶように楕円形を描いて飛んで行った。突然風がやみ、紙が落ちてきた。それはブーメランのごとく元に戻ってきた。そして草むらに落ちた。だから発見できたのだ」

今日はイースターだ。

神様だから、紙様だ。バディもこの老人の気持ちが分かるようになってきた。

また、老人は歩き出した。一緒について行こう。この人のために。**For you.**

雨が激しく振ってきた。先が見えなくなった。老人は自分の甘い判断に嘆いていた。「傘を持ってくれば良かった」と

「往きはよいよい帰りは怖い…」その通りだ。

「急がば廻れ」と言い聞かせていた。ことわざ通り、気を付け過ぎて、回りすぎたのだった。やっぱり行きと帰りでは同じ道なのにどうして違ってくるのだろうか。

本当に自分がみじめになってきた。真実は一つの道なのに。行きに来た一本道が帰りは二つの道に見える。不思議だ。人生もそんなもんか。どちらかの道へ行くべきか決断する時が来るのだ。後戻りはできないのか。

どうも行き過ぎたようだ。左折の所は芝生のグラウンドがあったはず。雨で見逃したか。取りあえず左に曲がる。やっぱり来た道と違う。失敗は成功の元。必ず良い事もあるはず。弱る心を励ましていた。

Mudgreeraba 教会だ。

入口に、バディだ。

老人はハローと声をかけた。バディはウワンと一吠えも言わずに、尻尾を振って老人を導いた。バディは見えないものを見つけたのだ。老人も見えないものを見つけたのだ。

老人が求めている家はバディが求めていた故郷と同じ道と思い始めたのだ。1年前の事を思い出していた。あの夫人がバディを抱いてくれたあの匂い。この老人に同じ匂いが感じられたからだ。

「今日はイースターだ！」

バディも昔を思い出していた。

この道路の匂いと眺めを。

毎日のように来たコンビニとガソリンスタンド。

老人とバディの足は軽くなった。

バディと老人は全く方向が一致したのだ。

College だ。

Exbridge Court だ。

Number 2 だ。

「ただいま！」

(第9話) Gold Coast (ゴールドコースト)

バディは週末に、ビーチへ行っていた。車で20分だ。トムに連れられて、天気の良い日は大勢の人でにぎわっていた。車が止められなくなっていた。皆をビーチに降ろして、トムは駐車場を捜して遠くまで行った。トムが来る間、Surfers Paradise (サーファーズパラダイス) で遊んでいた。ショッピングをしたり、トムが戻ってくると食事をした。

Surfers Paradise (サーファーズパラダイス) でのショッピングは切りがない。あれもこれも買いたくなってしまう。出来るだけ見ないようにしていた。マックでテイクアウトして、近くのベンチで食事だ。これが定番だ。カビル・モールとエスプラネード (海岸通り) はいつも賑わっている。

サーフィンをやっているのが垣間見えた。バディもサーフィンに挑戦したかった。どんな気分になれるのか。味わってみたかったからだ。

混んでいるときは Burleigh Heads (バーレイヘッズ) に行った。ここは穴場だ。海の向こうにサーファーズパラダイスの巨大ビル群がそびえ立っていた。時間帯によってはビーチのそばに車が置けた。夏になると、ここも一杯になる。ビーチを駆け巡った。貝殻を拾って遊んだ。ビーチはいつ来ても綺麗だ。歩くたびに「キュッ、キュッ」とこれが何とも言えない。誰かの鳴き声に聞こえることがある。

北からの風が吹くと遠いかすかな匂いだ。もう忘れかけている匂いだ。

南の風が吹くとボンダイビーチの匂いが。ビッグルスと共に食べたパエリアとホットドックの匂いが、つい2年前だから覚えている。忘れられない匂いだ。

ビーチで貝殻を拾って遊んだ。きれいな貝殻を見つけていた。

バディは何故か骨ばかり見つけていた。

サメに襲われた誰かの人骨か？バディは遠くを見つめていた。

ハワイ・ケアラケクア湾の匂いか。レゾリューション号の匂いか。

1779年2月14日キャプテン・クックはハワイ・ケアラケクアで殺害された。その死骸は今だに見つかっていない。

もしや遠きケアラケクア湾より流れ来きた人骨か。やっここにたどり着いたのか。

バディはいつも遠くを眺めていた。

バディがキャプテン・クックの骨の匂いだと思って一生懸命探していたのか。

キャプテン・クックの匂いかどうかを判明できる訳がない。現代科学の力をして。

If ビッグルスとバディがキャプテン・クックに会っていれば、then その匂いがキャプテン・クックの匂いだと証明できたかも。

この人骨をオーストラリア博物館へ行って調べてみれば分かるかも。

もしそキャプテン・クックの骨なら、バディは大発見だ。

時々トムには内緒でここまで来ていた。1時間で来ることが出来た。そして砂浜で駆け巡っていた。いや恋人を探していたのかも。

急にビッグルスを思い出していた。

「一緒に来て、見せてあげたかったなあ」

「一緒に砂浜を駆け巡って遊びたかった」

波の合間にサーファーが見え隠れする。そして、遠くに続く青い海原を。

これぞオーストラリアだ。

(第10話) バディの青春

ビッグルスが無くなって1年が経った。バディも8歳になっていた。気持ちが高ぶっていた。若い頃、情熱があったように、独立と旅立ちの気持ちが湧き上がってきた。いやバディはもうそういう年ではない。

「Youth 青春とは年齢ではない。情熱を失ったときに青春は終わるんさ」

とビッグルスがいつも言っていた。

バディには情熱があった。旅立とうとしていた。

Youth is not a time of life—it is a state of mind' (青春とはある期間を言うのでなく…)

トムに毎週のように連れてもらっていた。タンボリンマンテンのギャラリーウォーク。

ゆっくりとしたひと時。カフェでのおしゃべり。それが忘れられなかった。

Eagle Heights Wongawallan Rd の Tamborine Mountain Heritage Centre に入った。

OPEN SUNDAY. Other times by arrangement 日曜日でないのにトムが交渉して入れてもらっていた。ここではオーストラリアの原点があった。

Joalah National Park の Curtis Falls では滝の音、珍しい鳥の声何だったか忘れたが。

若者が自転車であっていた。それなら自分も来れると思った。

ついに決めた。トムや奥さんにわるいが犬だって恋をするのだ。

それはとんでもない事だった。

Gold Coast から M1に入る。Brisbane 方面に向かった。Oxenford を Tamborine 方面に左折だ。Eagle Heights,

そして山の中を… その後が分からなかった。

Tamborine へ行きそうな車を見ながら着いて行った。夜も暗くなってしまった。

それからは思い出せない。疲れ果てていたのだ。食べるものに飢えていた。

脂ののった肉の匂いだ。いつの間にかある牧場に引き取られていた。

ここの牧場主はちょうど牧羊犬を探していた。運が良かったのか、悪かったのか。牧場主に拾われ命だけは助かったのだ。

(第 11 話) バディは牧羊犬

牧場主は早速、羊を飼う訓練を行った。バディは呑み込みが早かった。

他の牧羊犬が何匹も必要なときでも、

人間が何人も必要な時でも、

バディは一人で引き連れることが出来た。

羊の群れを一人で離れることもなく動かしてしまったのだ。

牧場主は「どうして」そんなことが出来るのかと不思議がっていた。

他の牧羊犬も「どうやったら一人で羊たちの群れを連れて行くことが出来るのか」と聞いていた。「よく羊の群れや一人ひとりの能力を見分けるのだ」と教えていたが、バディのようにはできなかった。バディは人から命令されるのでなく

どうしたら羊の群れを楽に引率できるようになるのかを常に考えていた。

自分で考える能力を身に着けていたからだ。

まず羊のリーダーを見つける。そのために一人ひとりの羊をみていた。そして、困っていることがあれば面倒をみてあげていた。羊の兄弟、両親、親戚関係などなどよく見ていた。

「どの羊を誘えば他の羊もついてくるかを」常に考え見えていた。

人間で言うとよく分析していた。群れを細かく分けて、小集団に分けて、この群れのリーダーは誰か。そのまたリーダーは誰か。そのリーダーが困ったときはよく面倒をみて、世話していたからだ。だからそのリーダーを引率すれば皆ついてくるのであった。

何も吠えなくても、脅かさなくても、忙しくかけ回る必要もなかったのだ。自分たちのために羊同士で群れをつくって自然に付いてくるのである。誰もが離れないように。

牧場主は「不思議だ。不思議だ」

いつ覚えてたのか、持って生まれた才能か。いやThe Rocks で苦労した経験やビッグルスから教わった知恵を生かしていたのだ。誰もが出来るわけではないのだ。

羊の群れも必ず親分肌の羊が居るはずだ。よく観察していた。その羊に時には好物を取ってお腹が空いたときは分け与えていた。

ある時は飴を用意していたのだ。

この噂はタンボリンマンテンからゴールドコーストへさらにクイーンズランド州に広がった。

(第 12 話) Tamborine Mountain (タンボリンマンテン) での出会い

此処の経営者は利益をつねに考えていた。経営者としては当たり前だ。事前事業ではないからだ。ボランティアではないからだ。

「経営なくして牧場なし」

経営が成り立たなくては牧場を維持できないからだ。

ただ、利益だけでなく労働者や牧羊犬のことも考えていた。労働者には月に1度は街中へ連れては娯楽の機会を与えていた。お小遣いと休暇を与えていた。そのときは牧羊犬が活躍する時であった。そういう時は牧羊犬にもおこぼれがあった。好物を与えてくれた。休養も考えてくれた。月に1度は牧羊犬にも遊ぶ日を、自由な時間を与えてくれた。牧羊犬をグループに分けて、自由な時間を、遊ぶ時間を設けてくれた。それが楽しかった。

バディは Joalah National Park (ジョアラ国立公園) の Curtis Falls (カーティスフォールズ) に連れて行ってもらってから、滝に興味を持った。好きになった。滝の上に登るにはどうしたらよいか登り方を探していた。滝のすぐ脇には足場がしっかりしていることを発見していた。また、けもの道があることを巻道があることを、回り道をすれば必ず登れることも知った。同じ滝でも色々なルートを探して登っていた。最後は藪になり高台になり、広場があることを知った。

滝には歴史があることも初めて知った。初めは、川の急な斜面から年月をかけて、少しずつ削られ岩が残り、小さい滝になった。更に岩が削れられて大きな今の滝になった。今でも滝は動いている。だから古い川の脇の道が今でも残っていれば、滝の脇を上に登れば昔の道に出会えた。滝の上に出ればまた水を蓄えた静かな川があるか、水が無くなれば、最後は藪になり高台になり、広場があることを知った。

タンボリンマンテンにも何回か連れてもらっていた。

それが偶然 Original Winery で老人に出会った。The Rocks で見た、トム宅に宿泊していた老人に出会ったのだ。まさかと思った。老人はハローと声をかけてくれた。

バディの方は返事ができなかった。だって、連れの相手はトムでないからだ。

老人もまさかバディとは気が付かなかった。姿も変わっていたからだ。

老人は1時間前にトムと German Cuckoo Clock Nest の前の Original Winery で会おうと約束して、分かれた。お互い自由に散歩して待ち合わせの場所にしていた。老人は待ち合わせ場所を間違えると迷惑がかかると思い、念のために、早めに来ていたからだ。

If トムがもし少し早く来ていたら then,

今日はバディを連れてきてなかった。そういえば家にバディはいなかったからだ。

老人は「バディはどうしたのですか」そんなこと聞けなかったからだ。バディに会ったのは

もう2年前の事だったから。

なんと運命は悲しい。折角会ったのに。

次に会えるのは何時になるのか。または一生会えないのか。いつかは会えるが生きてあえるかどうかは誰も分からない。

(第13話) 喧嘩

「あいつは生意気だ」

「俺の仕事を奪った」

バディが頑張れば頑張るほど他の牧羊犬はねたんだ。他の牧羊犬がバディの群れに対して、牧草地や水飲み場を荒らした。牧場主が旅行に行っている時に起きた。手薄なときに起きた。バディの群れが行く牧草地は既に食べられていた。水飲み場の水量も減っていた。濁っていた。「誰の仕業だ」と牧場主に訴えたが後の祭りだった。今日食べなくてば、今飲まなければならないのに。他の牧羊犬とうまくいけなくなった。バディは何でも一人でやってしまうので、他の牧羊犬達は減らされると思っておびえていた。

恐怖が牧羊犬に広まった。バディを追い払おうと悪巧みを働かしていたのだ。牧場主がバディを褒めれば褒めるほど可愛がれば可愛がるほど他の牧羊犬は焼き餅を抱いた。

「バディのやつめ、今に見ている」「新参者めが」

バディも牧羊犬同士のしきたりがあったとは分からなかった。

急に経営が苦しくなった。羊毛の値が下がったからだ。

この経営者は牧羊犬がどれだけ重要な役割を持っていたか理解していなかった。

遂にバディを手放す時が来た。

バディを是非売ってくれという経営者が現れた。いや殺到したのだ。バディの評判を聞き高値で売ってしまったのだ。

ただで拾った犬が牧場一つ買えるほどの値が付いたのだ。普通の牧場主なら絶対に売らない。どれだけ牧羊犬が大事かわかっているからだ。

この経営者は目先の利益にくらんだのか。

バディがいれば、人件費も安くなっていたこと

牧羊犬の数も少なくて済むこと。

えさ代も経費がどれだけ安く済むかを分かってなかった。

(第14話) Springbrook (スプリングブルック)

今度はもっと南のスプリングブルックの方の牧場主に引き取られた。牧場は広かった。数百エーカーあった。タンボリンマンテンの数倍はあった。

この経営者は英国のコッツウォルズ地方の出で。冬になるとコッツウォルズに帰るのだ。英国は夏であった。コッツウォルズ地方は夏でも過ごしやすかったからだ。

趣味で牧場を始めたのだ。

人生はゆっくり ゆっくり

Slowly Slowly

と言っていた。人の扱いもしっかりしていた。

人あつての経営 牧羊犬あつての経営

といつも思っていた。

人と犬と自然 いや人間は自然によって生かされている。

人は羊によって生かされている。

人間が犬や羊や自然を支配するのでなく、その逆と思っていた。

人間は犬や羊や自然によって生かされていると考えていた。

ただの牧場主でなかった。羊毛の品質にもこだわっていた。行く着くところは羊自身にも興味があった。コッツウォルズ地方の優秀な羊を17頭連れてきたのだ。それを掛け合わせて羊を増やしていった。今では千頭はいる。羊の経営に人手が不足していた。なかなか羊毛犬を扱える人も少なくなってきた。牧場で働く人が少なくなっていた。お金が入ると皆都会に出て行った。なんとか少ない人数でできないか考えていたのだ。バディにはそれだけの価値があると踏んでいた。時期も時期、羊毛の需要が増えていた。特にこの地の羊毛の品種が良く、評判が良かったからだ。値も上がった。輸出するまでになっていた。

息子の代になって、欲が出てきた。息子はブレスベンの大学を出て、経営学を学んでいた。

経営も拡大したかったからだ。牧場も広くなり、隣の土地も空いていた。

管理は徹底していた。投資はするがそれに見合う利益も考えて経営するようになっていた。

優秀な牧羊犬が何頭もいた。バディも任された。

初めは20頭、次に30頭、50頭、と牧場主も牧羊犬の能力を見計らって、頭数を決めていた。

遂に100頭一人で任されたのだ。

(第15話) Glowworm (ツチボタル)

スプリングブルック国立公園にはよくピクニックで連れて行ってくれた。

Natural Bridge (ナチュラルブリッジ) にも行った。夜は幻想的だった。ツチボタルが一斉に青白い光を放った。洞窟の中は特にすごかった。数えきれないほど、星の数ほど

洞窟に星 地に花 人に愛あり

バディはツチボタルが好きになった。興味を持った。「どうして美しい光を放つのか」

他の洞窟も行って見た。滝がある所には洞窟があった。タンボリンマウテンでは滝を探していたので、ここでも洞窟を探すことが出来た。昼間でも洞窟の奥、暗い所で見ることが出来た。ここは自分の「秘密の基地」にしていた。洞窟を探す中で、色々と洞窟の違いやけもの道などを見つけていた。

「この洞窟や道の発見はノーベル賞ものだ」と自負していた。

Only one だ。自己満足だった。それでよかった。他人には関係ないのだ。

「自分が満足すればそれでよいのだ」「自分が満たされれば」

それがいつか役立つとはだれが予想できたか。

ツチボタルはどこにいったのか、その日の夜は光が少なかった。

世界自然遺産に指定されたナショナルブリッジはツチボタルで有名だった。ツチボタル観光のために道路は整備されていた。夜遅くまで多くの人を訪れていた。観光化するために牧場をつくるために大木が切り倒されていた。車が通れるように。大型バスも来ていた。観光には便利になっていた。

自然が怒ったのか。

人間が自然に生かされていることを忘れたのか。

崖のツチボタルは消えた。次は何が消えるのか。洞窟の中のツチボタルは残ったが減っていた。青光りも薄くなってきた。

あんな狭い場所に大型バスが何台も夜の8時。

「がやがや」「ぺちやくちやくちやくちやくち」「もうやめてくれ」ツチボタルは叫んだ。フラッシュでの撮影が禁止された。規制が始まった。大型バスは1キロ前に、後は指定のバスか乗用車のみ。それでもツチボタルの数は減ってきた。

ツチボタル 飛び散りたりて 旅立ちぬ

(第16話) 集中豪雨

良い事ばかりではなかった。嵐がやってきた。今年の嵐は違っていた。

前日まで雨が続けていた。水かさが増していた。少しずつ。少しずつ。

何日か続いた。遂に豪雨になった。

「ドカーン」聞いたことない音だ。

川にある自然の堤防が崩れたのだった。牧場が水につかり始めた。牧舎も水につかり始めた。取りあえず数日の食料を確保して、非難するしか手はなかった。

羊を一時高台に避難させる必要があった。人手が足りなかった。まずは自分自身を避難させるしかなかった。

その日は牧場主ともども年一回のブリスベン旅行へ行っていたからだ。残っている人は2人だけだ。どうすることもできない。緊急に連絡したが間に合わなかった。

牧場は水浸し、上流も下流にいても小さな沢が濁流のごとしで道行く道をふさいだ。逃げる道はなかった。上にも下にも横にも逃げられなかった。あとは崖をよじのぼるしかなかった。たくさんの羊を登らすのは無理だった。水につかりながらも過ごすことしかなかった。何とか一夜を明かすことが出来た。

翌日は晴れた。道路の水は減ってきた。

どうしたことか川の水量はすぐには減らなかった。水量は逆に増えていた。上流で草木に蓄えていた水が溢れ出てきたのだ。小さい川が鉄砲水になっていた。より危険であった。

昨日渡れた橋も流されていた。

ニッチもサッチも行かなかった。人間が逃げることは出来たが、羊の群れを避難させる方法はなかった。濁流が道路を横切っていた。一步踏みはずせば濁流に持って行かれた。流れに逆らって横断できたとしても人間一人ひとり、向かい側の木にロープをひっかけてロープに自分を固定して、濁流に逆らって横断できたかも。一人だけなら。それだけの危険を冒すことは出来なかった。

水が引くのを待つだけだった。それまで食料を確保、牧舎の破壊を何としても途中の橋は川が溢れ水を被り、とっくに流されていた。

崖によじ登り救援隊を待つだけであった。ヘリコプターで人間だけは助けられた。

バディはあの日の夜も、羊の群れを連れ歩いていた。ツチボタルの近くに来ていた。その数は減っていた。そのときもツチボタルの青白い光に照らされて岩場を登った。這い上がって行った。いくつもの滝の脇を登った。滝の脇には必ず足場があったからだ。濡れるのを少し我慢しさえすれば登れたのだ。羊も登ったが、「あっと」叫んだ。一頭の羊が滑って滝つぼに落ちた。そのまま流された。アップアップしながら流された。

「どうすることもできなかった」「ロープを投げても。投げても駄目だった」

目の前で仲間が死んでいった。それを見た他の羊は二度と登らなくなった。

道路の水傘の量が減ってきた。雨がやんだのだ。それでも注意を払った。数時間後の方が危険なことを知っていた。雨がやんだ後しばらくしてから鉄砲水が出ることを知っていたからだ。その方が危険であった。

それから泥流にも注意した。泥流に入ったら二度と足が抜けなくなることを知っていた。アリ地獄と同じになることをみてきたからだ。どうすることもできないのだ。

「助けてくれ」と叫んでいても。仲間を泥流にはまった経験を知っていたからだ。ロープでもだめ、手も貸せなかった経験を幾度も見て来たからだ。

バディは思い出していた。崖には必ず巻道、回り道があることを。けもの道とも言った。途中で草木で隠れていても草木をかき分ければ道が出てくることを知っていた。バディは発見したのだ。ここなら羊も登れると。その先には高台になり、平地があることを。

(第 17 話) Brisbane (ブリスベン)

あの日から何日が経った。バディはウトウトとしてきた。助かったら、ブリスベンのクイーンズランド大学に行きたかった。経営者の息子がブリスベンの大学で学んだと言っていた。勉強したくなかったのか。バディは無理だろう。「If この間の体験、経験を論文にまとめて、博士号を取れるなんて誰も考えられないよ」経営学でなくバディは動物の行動学や生態学を学びたかった。

「City Hopper (シティホッパー)」という大きな声が聞こえてきた。フェリー乗り場を出発するたびに「シティホッパー」と大声を張り上げるのだ。「City Cats (シティキャット)」と間違えないように。無料でクルーズ出来たからだ。何か誇らしげに聞こえた。ブリスベンを代表する船乗りのようにハリのある声だった。エンデヴァー号のキャプテン・クックのよ

うだった。いやキャプテン・クックはそんな声を張り上げないよ。

ブリスベンはクイーンズランド (QLD) の州都である。老人は QLD Art Gallery & Gallery of Modern Art でピカソ展を観ていた。「デッサンが気に入った。ピカソは基礎がしっかりできていたのだ」と

言っていた。犬の大きな像を見て感心していた。像は模型的であった。急きょ作られたのだ。誰かに似ている。スケッチを始めた。バディの像だとは分からなかった。分かっていたらバディと最後の別れができたのに。老人は今日が旅の最終日だった。

「今回の集中豪雨で一匹の牧羊犬が助かった」とニュースが流れた。それがバディだった。

「もう命が助からないとも」

老人はその像の前で椅子に座ってスケッチしていた。何分も。

老人は「誰かに似ているな」と感じないのか。

像は「バディだよ」と言いたかった。像はしゃべれない。

バディは病院で手当てを受けていたからだ。

生き残った唯一の牧羊犬と新聞に出た。オーストラリ全土にニュースが流れた。

それもそのはず、バディは自分だけでなく羊 99 頭を高台に引き連れて助けたことが報道されたのだ。バディは大けがをしていた。

「なんとか助けて」「助けてあげて」「死なないで」と子どもたちから一斉に声が上がった。

バディは自分の命と引き換えに 99 頭の羊の命を救ったのだった。

「バディは命には勝てなかったが、悔いなく戦ったのだ」

それが国民に勇気と感動を、皆の心を震えさせた。

バディの「責任を果たしたという気持ち」とすべての人々が感じた気持ちが一体になったのだ。バディにしかできない達成だった。

B and B (ビッグルスとバディ) 神に抱かれて 共に眠る

M1 はまだ台風の被害で開通していなかった。トムは途中で引き返していた。

鉄道が開通したとの連絡が入り、Varsity Lakes Sta. (バーシティレイクス駅) から South Bank (サウスバンク) へ向かった。

老人はバディの最期をみとれず、翌日の朝

ブリスベン国際空港から旅立った。

(第 18 話) 帰国

老人は飛行機の中でなかなか眠れなかった。どうしてか。「あの時どうしてバディを抱いてあげられなかったのか。一度でもどうしてできなかったのか」自問していたからだ。

家内は「一緒に食事した時、テーブルの下に来たとき、食べ物をあげた。その後またそつと寄ってきて、テーブルの下から「とんとん」と前足で要求していた。2度はあげなかったが、そのしぐさがかわいいのよね」と言った。またよく抱いてあげていた。

老人はなぜバディが、死んでしまったのか、過去をもう一度振り返っていた。「バディが

死んでしまったのは、一度帰って来たときに、また旅に出て行かなければ、死ぬことにならなかったのだ。こうなった原因は私にあるのだ」と言い切った。

「何を言ったの」と家内から問われた。

「あの時、**Youth is not time of life—it is a state of mind.**

Nobody grows old only by merely living a number of years.

People grow old only by deserting their ideals.

Years wrinkle the skin, but to give up enthusiasm wrinkles the soul.

青春はある期間を言うのでなく、心の様相をいうのだ。

歳を重ねるだけでは人は老いない。

理想を失うときに初めて老いる。

歳月は皮膚のしわを増すが、情熱を失うときに精神はしぼむ。]

「**Travel is trouble. If travel is not trouble, then the travel is not travel.**」

(旅にはトラブルがつくも。旅にトラブルがなかったら、その旅は旅ではない) と言ってしまったのだ。

「そんなこと今さら反省しても遅いわ。いつも、あなたの場合は自分でトラブルを起こしているんだから、そんなヘソ曲がりはいないわよ」更に追求される

「あの時もマグレバーの村に行ったときもなかなか帰ってこなく、皆が心配して探したのよ。トムは車で何回も探し回ったのよ。それなのに、あなたは平気な顔をして帰ってくるなんて、信じられないわ。バディにあったから帰れたのに。バディのお蔭で帰れたのよ」

「すまん。すまん」「一度でないのよ。旅行に行く度にトラブルを起こしているんだから、一体何人に心配かければ気が済むのよ」

数日後、トムから連絡が入った。

「バディは生き返った」「本当ですか」「嘘ではない。もうダメだと思い、ブリスベンにいったときは、危篤状態だった。しかし、生命力があり一度死にかけたが。回復した。奇跡が起きたんだ。皆喜んでいて。退院は出来ていないが、あと2週間もすれば退院できる」と信じられない。バディの生命力。希望を持ち続けたんだ。今度会ったら、

You'll come a waltzing Matilda with me

(僕と一緒に気ままな旅に出ようよ)